

福島県立図書館
東日本大震災福島県復興ライブラリー

ブックガイド

No. 11 2014.10.31

■文学 体験記

『日の鳥』

こうの 史代／著 日本文芸社 2014.5 369.31/コ7145

居なくなった妻を求め1羽の雄鳥が旅に出た。行き先は東日本、東北。彼の目から見た、震災後の風景とは。

東日本大震災後に東北を訪れた著者が、まち、人、自然の姿をボールペンの柔らかなタッチで描き出す。暖かく穏やかにみえる景色から時折あふれ出るせつなさは、忘れてはいけない「あの日」を思い起こさせる。

優しいイラストと雄鳥くんの一言が、そっと心に寄り添う一冊。

■各組織の震災対応

『わたしにできること。個人の「なにかしたい！」からはじまった、12の絆の物語』

筑波君枝／著 メディアファクトリー 2012.3 369.31/ツ123

広範囲に被害をもたらした東日本大震災では、「支援」のあり方についても注目されました。その中で、「何かをしたい」という小さな思いが、結果として人と人とのつながりを生み、被災地のために大きな効果をもたらした例がたくさんあります。そんな勇気ある貴重な一歩を踏み出した12の事例のレポートです。

■復興 防災

『被災鉄道 復興への道』

芦原伸／著 講談社 2014.7 686.212/ア7147

東日本大震災時、東北地方の太平洋沿岸路線を走行中の列車は31本。駅の流失や線路の破壊などの甚大な被害があったにもかかわらず、乗客や乗務員の死傷者は一人もいなかったという。その奇跡とも言えるべき当時の状況とその後の復興の過程を、鉄道ジャーナリストの著者が、何度も現地に足を運び丹念にまとめあげた。「鉄道は日本の生活文化遺産であり、その復興は地域の発展に欠かせないものである」と説く著者の鉄道への深い思いが伝わってくる。

■こども向け

『おじいさんとヤマガラ 3月11日のあとで』

鈴木まもる／作・絵 小学館 2013.3 P/ｽﾌ

山の中に住むおじいさんは動物が大好き。毎年、冬になると家の周りに巣箱をつくります。そこにヤマガラが来て子育てをするのを楽しみにしています。しかし、あの事故の後、子育てのためにやってくるヤマガラの数が減り、おじいさんは心配です。

原発事故が自然界に与えた影響は長い時間を経ないと分からないことが多くあります。風化させることなく伝えていくためにも、長く読み継いでいきたい絵本です。

『お米が実った! 津波被害から立ち上がった人びと』

小泉 光久／著 汐文社 2014.2 615/ｺ

東日本大震災の津波被害は、海沿いの町や建物だけではなく、田んぼをも襲いました。不安と混乱が続く震災の年、どうにかして米作りができないかと奔走した人達があります。ヘドロと海水に浸食された田んぼを前に、彼らを突き動かしていたのは、この土地でも生きていける希望を皆に見せたいという強い想いでした。秋にお米が実るまでの過程を、児童書ならではの分かりやすい塩害対策などを踏まえて追っていきます。

■その他 *他のジャンルに属さないもの、特化していないもの

『黒い海の記憶 いま、死者の語りを聞くこと』

山形 孝夫／著 岩波書店 2013.4 160.4/ﾂ 134

宗教人類学者である筆者のエッセイ集。被災者の実体験や筆者自身の経験をふまえながら、つらい過去を記憶することの意味を考えます。死者の悲しみと向き合うことで、そのむこう側から、優しい未来がやってくる——それが仏教でいう「慈悲」であり、キリスト教の「悲愛(アガペー)」ではないか。死者の記憶と共に生きることは、遺された者にとっての救いにつながるだろう、と筆者は書いています。